法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-10-14

中河與一「ゴルフ」考: 初出誌・初刊本の 異同について

黒田, 俊太郎 / KURODA, Shuntaro

(出版者 / Publisher) 法政大学経済学部学会 (雑誌名 / Journal or Publication Title) The Hosei University Economic Review / 経済志林 (巻 / Volume) 90 (号 / Number) 3 • 4 (開始ページ / Start Page) 244 (終了ページ / End Page) 220 (発行年 / Year) 2023-03-28 (URL) https://doi.org/10.15002/00026463

中河與一「ゴルフ」考―初出誌・初刊本の異同について―

黒 田 俊太郎

序

味について若干の考察を行うものである。 フ』(昭和書房、 の短篇小説である。同小説は、大小様々な改稿が施され、「ゴルフ―一名、鏡に這入る女―」として小説集 「ゴルフ─一名鏡に這入る女─」(『文藝春秋』一九三一[昭和六]・一○)は、中河與一(一八九七~一九九四) 一九三四・一〇)に載録されている。本稿では、両者の本文について校異を実施し、その異同の意 『ゴル

万仞

一、「ゴルフ─一名鏡に這入る女─」(『文藝春秋』一九三一[昭和六]・一○)を「ゴルフ」、小説集『ゴルフ』(昭 して、小説「ゴルフ」という表記を用いる。 和書房、一九三四・一〇)所収の「ゴルフ―一名、鏡に這入る女―」を『ゴルフ』と表記する。また、 総称と

一、漢数字で『ゴルフ』の頁数、アラビア数字で『ゴルフ』の行数を記した。

九

主要な登場人物一名の名前が変更されているが、指摘は最初の一度だけとした。

それらのルビの異同は校異に記さない。

校異

Ŧī.

〈『ゴルフ』本文←「ゴルフ」本文〉のように、 ←の前後で改稿を示す。

四 逆に、「ゴルフ」本文に有った文言が純粋に削られた部分については、□←「ゴルフ」本文、 「ゴルフ」には無かった文言が純粋に加筆された部分については、『ゴルフ』本文←□、のように示す。 のように示す。

Ŧ. 『ゴルフ』 の同一頁同一行に異同が見られる場合、 改行して併記した。

六 旧字体は新字体に改めず、そのままにした。

七 明らかな誤植は校異には記さない。

「ゴルフ」・『ゴルフ』 はともにパラルビだが、

6 5 イオニア海からそよそよと、ギリシャ神話が、 久里は、今椅子の上で一本の煙草を吸ひ終つた。↑ギリシヤ神話がイオニア海からそよそよと風になつて 風になつて吹きあげて來た。 うららかな古典にとり卷かれ なが

やがて彼は密生した芝生の上へ妻と一緒におりて行つた。小さいテイを草の中に立てると、眞つ白のボ 吹いて來た。うららかな古典に卷かれてゐる高い緑色のゴルフ場に立つて、 ズボンから掴みだして、 其の上に乘せた。 ←密生した芝生が露でしめつてゐた。彼は小さいテイを草の中に立 久里は一本の煙草を吸ひ終つた。 ールを

12

てらすと、眞つ白いボールをズボンから掴みだして其の上に乘せた。

14

する↑した

15

買入れたばかりのクラブを動かすと、むつかしい顔↑買ひ入れたばかりのクラブを動かしながら、氣むづかし

六 い顔

1 共に勢ひのいゝショツトをだした。←共に、

勢ひよく球を打つた。

2 球の弾道←弾道 スウツと←ボールがスウツと

落ちると、←落ちると

、小さいボールを目で追つてゐた。それは←自分に感心して立つた。小さいボールは

6 5

如何にも←それが實に

彼女の方も大變に←妻君の方がもつと

14

二人の會話には、←二人の會話には

4 七

何かのこだはりのやうなものが、←深い感情が

やがて彼等は二人の少年を從へると、←彼等は二人の少年を連れて

6 妻←妻君

想像して胸を重く←想像して

7

あの張りつめた←張りつめた

12

おかしくみえた。←みえた。

8 あの突然現はれて吾々の胸に影を投げたフランス女。←なんと幸福な夫婦生活。

八

1

3 思ふと皆たのしかつたの。 なかつたわ。←なかつた。 ルイーゼ←アニエス

←思ふと、皆たのしかつた。

5 はないの。←なくてよ。

6

←アニエスは少年からミツド・アイロンのクラブを受取ると、又無心の形をして草の中にある白い球を打つた。

少年からミッド・アイアンのクラブを受取ると、又無心の形をしてルイーゼが草の中にある白い球を打つた。

9 10 しまったわ。 その上到頭厄介なハザード↑一度だけおくれた。その上到頭厄介なバンカ ↑しまった。

15 唯だ歩いた。歩いてゐるとやがて彼等は何もかにも忘れた。←又歩きだした。何もかにも忘れてゐた。

12

亦同じハザード←又バンカ

7

低く蝶々のやうに地面を摩りながら←反つて低く

8

3

ドイツ女←フランス人 の一つになつてゐたから。←であつた。

離れ業は、←離れ業は

逆さまにつりさがる。←、倒しにつらさがつた。

14

15

グルグル巻く。←巻いた。

九

するらしかった。

←してゐた。

2 1

方角を、小舎の方←方を、小舎

といふのは、彼等←彼等

曲藝師で、彼等の空中曲藝こそ←曲塾師であった。彼等の空中曲藝

置いてある。一萬六千人もゐるアメリカの民間飛行家の中から選ばれた二人。↑置いてあつた。

久里は幾度目かのバンカーで又手こずつてゐた。熊手でよく整理してある砂を叩きあげながら、←熊手でよく 機械文明の持つてゐる明らかな一つの方向である。←機械の廻轉によるの

から氣嫌を取るやうに云った。

ルイーゼの方から云つた。←今度はどう思ったのか、

彼女の方

14 9 見るとでせう。←見るとね。 空でする操作←空に浮きながらする仕事 整理してある砂を久里は叩きあげながら云つた。

2 1 4 餘り無言がつづくと、今度はどう思つたのか、 方々に←方々で キヤデイが二人の爲めに←二人とも パターを持つと↑パツトを持ちなほすと

14 持つて、←持つてて かゝつて↑かかつて

15 又一寸ひつかゝり←一寸ひつかかり

8 街は古い傳統を持つてゐる、然し、←そこは古い傳統を持つてゐたが、

出たり、←出たり

9

見えてゐる。←見えてゐた。

いろ~~~いろいろ 馬鹿←甘い馬鹿

13 15

10 8 誰れかゞ←誰れかが 親切だつた←よかつた 3

やがて彼等はジプシイ・モスを仕入れた。←ジプシイ・モスを仕入れた。

四

14

五年前に←五年前に、 いろ~~~いろいろ 鏡の中の久里←久里 場合でも、←場合も。

13

12 11

何時も話をしてゐた。

何時も三面鏡の前へ腰をかけて化粧をした。←三面鏡の前へ腰をかけて化粧をしてゐた。

見つめてゐると、←□

5

1

球は←球が

引くと↑引きながら

11

俺達の方←俺達の顔

10

中河與一「ゴルフ」考一初出誌・初刊本の異同について一 (8) 237

15 13 11 6 九

つゞければ←つづければ

うか~、←うかうか。 認めるのにはなか~~の↑認めるのには、 又不平を云つた。←怒つた。

なかなかの

14 11 8 1

思ふんだ↑思ふんだがな そんなら←それなら 持つても←持つても、 事←作業 12

<u>一</u> 五.

13 亦←又

誰れかゞ←誰れかが

ルフが好きであつた。自分の眼が

3

一寸彼も気色ばんだが冷靜に答へた。←□

努力をして來た。←努力をしてゐる。

2

ものなら←ものだつたら

8

どうしてなの←どうしてだ

- 6 熱中してゐるんだい。↑熱中してゐるのか知らない。
- <u>--</u>
- 4 ○·六**←**○、六

14 部屋の空氣が息づまりさうになつてゐた。←息づまるやうに部屋の空気が重くなつてゐた。

4 あのフランス女と逢つてゐると、女は何時も黑い面帕をつけて來た。その心に残る美しさが彼の心にしみつい た事を思ひだした。初めて逢つた時、 あの瞬間、 思ひつくと自分の眼は←あの女と逢つてゐると、あの女もゴ

情を水平に保たうとした。毛彫りのやうに心理が級密に動いた。彼は女を警戒しだした。 その時、彼は感情を水平に保たうとした。女を警戒しだした。毛彫りのやうに心理が緻密に動いた。 ↑彼は感

6 二四

3 7 気がして、然し靜かに云つた。

 \equiv

9 ロシアの自由な離婚法←ロシアの離婚法

平凡だが愛情の芽←愛情の芽

←氣がして叫んだ。

眺めたいんです。 ↑眺めたい。

13

11

祈つてゐるの。 ←祈つてゐます。

15 壊れかゝつた←壊れかかつた

<u>二</u> 五

11

彼はそんな事を考へながら女と幾度も逢つた。逢ふ場所は林の中や、草の中であつた。恐らく原始を思ひだし

サロンでする戀愛は何時も疲れてゐる。←□

てゐるのに違ひなかつた。

12

14

それにしても彼は←彼は

自分は女から遠ざからうとしてゐる。←□

久里は長い間默つてゐてから、云った。←久里は默つてゐると、云つた。

あのフランス女を好きだしたつてわけね。 ←好きな人が出來たつてわけね。

背面になつたり、

6

空の中に浮んだ。

←駆けあがるやうに空の中に浮んだ。

幾度か格納庫ぬけを繰り返した後、

二六

15 廻つてゐる。←廻つてゐる 13

つゞけてゐた。←つづけてゐた。

今割れるやうな←今割るやうな

物珍らしさうに會場の中をうろうろしてゐる。←交つてゐた。

10

革の草履をはいた←觀衆の中には革の草履をはいた

集つて來てゐる。←集つて來てゐた。

9

一枝を手に持つたり←そのうへ、一枝を手に持つたり

臭いガソリンを人々に吹きかけた。←ガソリンを吹きかけたり、

8

持つて來られるし、持つて來られ、

7 4 3 2 1

皮肉から始めたり、←皮肉から始めた。

なびきかゝつたり←なびきかかつたり

アルゼンチン趣味が來て人々をあつと云はせるかと思ふと←アルゼンチン趣味が來て、人々をあつけにとらせ

景觀を誇つたり、←景觀を誇り、

12

- (12) 233
 - 6
- 12

消しては描き←恥づかしさうに描いては消し、

描いては消し

- 恥づかしさうに描いては消し、 あまのはら←あまの……
- つゞられた。←つづられた。
- 5 今全然地上では←今、全然地上では
- ま ¹ ↑まま

柔かい絨氈になり、←莚のやうになり、

あのフランス女←あの女

もつと下へおりるよ←もつと下へおりるよ。

くゝりつけて←くくりつけて

12 11 9 8 6

- 二九
- 觀衆の頭とすれすれに↑觀衆の頭をすれすれに
- 逆さまに←倒しに

9 3

14 13 逆さまになつたま、←倒しになつたま、流星のやうに ささへてゐる一本の足をさへ←一本の足をさへ

15

それは一つの埃りのやうにチラチラした。

それは一つの埃りのやうにチラチラしたかと思ふと、見えなくなつたり、ハッキリと觀衆の眼に映つつた。

 \uparrow

 \equiv

1

だが誰れも危険を感じなかった。

←誰も危険を感じなかつた。

2 愛情←愛

8 かも知ら………。 ↑かも知れない。

11

鏡に向つてゐる自分ほど幸福なものはない。

13 何かゞ←何かが

14

と、パラシュートがパツと開いた。←と、パラシュートが開いた。

ゴルフのボール位にしか見えなかつたが、パラシユートにかゝつてゐる久里であつた。←ゴルフのボー

-ル位の

白い球に見えた。パラシュートにかかつてゐる久里である。

 \equiv

だが彼は今最後の傘を開かうか、開くまいかと考へてゐた。←だが彼は最後

今明らかに自分は空の中の最も大切な友達を意識か無意識の中で見失つてしまつてゐる。

←今明らかに空の中

の大切な友達を意識か無意識の中で見失つてしまつた。

死ななければならない。←死ぬべきだと思ふ。

10

冒險←事

11

消へてしまふだらう。←消へてしまつた。

2 1 善良なものか悪魔的なものか←善良なものか、 自分はそれを開いてやつた方がいいのか、それともそのままにしておいた方がいいのか。そのままにしておけ 悪魔的なものか

4 近づくに従つて次第に←近づきつつ 觀衆の心に恐ろしい不安が起つた。←恐ろしい瞬間の曲藝を開始しよう

ば恐らく自分は地面に向つて烈しい衝突をするに違ひない。

←自分は死ぬべきか。

生くるべきか。

としてゐた。 瞬間の曲藝を開始しようとしてゐた。

それ以外に彼の生命を決定する何物もなかつた。

14 秋晴れの雲←秋晴れの中の雲 10 9

13

飛行機と、 長い時間。

←飛行機と ←長い時間

本論

①タイトルと本文の主な異同

゙ゴルフ」(一九三一・一○) には、「─一名鏡に這入る女─」との副題が付されている。 この副題には、 『ゴルフ』

とは言うまでもなく異名・別名の意であり、両者は主題/副題というような階層性が含意されるような関係にはな (一九三四・一○)刊行の際に、「−−名、鏡に這入る女−」というように、「一名」の後に読点が打たれた。「一名」

れていく。ただし、『鏡に這入る女』(村松書館、普及版一九八○・一○、限定版一九八○・一一)刊行の際に、「一 ―一名ゴルフ―」となり、以後、生前に刊行された全集や文学全集、文庫本などでは、おおむねこの順序が踏襲さ ところが、これらの順序は、小説集『愛の約束』(人文書院、一九四○・三)所収の際に逆転して「鏡に這入る女

名ゴルフ」の文字が消失する。

というタイトルを優先するようになり、そうした心境は晩年に強くなっていった。 記することとした。 こうしたタイトル変容の軌跡から、次のようなことが推測される。中河は当初、タイトルを決めかね、 初出からおよそ九年を経ても、一名併記の状態は変わらないものの、 次第に「鏡に這入る女」 一名を併

西村将洋がすでに指摘しているように、「女性性の置き換え」(^)ということである。 たが、なかでも本稿が検討している『ゴルフ』刊行時の改稿は多岐に亘るものだった。このときの最大の変更点は こうした微細かつ緻密に計算された改変は、タイトルだけでなく本文に対しても、 晩年にかけて断続的に行われ

である。 「ゴルフ」の主な登場人物は、アメリカ生まれの日本人「久里」と、その妻である「フランス人」の「アニエス」 また目立った登場シーンはないものの、久里の国籍不明の愛人を、潜在的な登場人物として数えることが これらの登場人物のうち、 女性二人の設定が、『ゴルフ』刊行の際に変更されている。すなわち、「フラン

ス人」の「アニエス」は「ドイツ人」の「ルイーゼ」となり、国籍不明の愛人は「フランス人」と明記されるよう

230 (15)

になる。

中河與一 「ゴルフ」考一初出誌・初刊本の異同について一 書店、 強めていったからとする理屈では、 れているのである。『ゴルフ』刊行時に久里の妻が「ドイツ人」に変更されたのは、中 里の妻は再び 版 ルフ』刊行時に見られた「女性性の置き換え」と、「形式主義から全体主義へ」という中河の思想上の転換とが (角川書店、 「軌を一にしている」とまでいえるのかということについては、検討の余地がある。 画荘文庫の一 というのも、 (米国オクラホ 画 九六七・二) 一荘文庫刊行時のこの変更は、 一九五四・一一)に所収の小説 一九五〇・六)、『香妃 「フランス人」の「アニエス」に戻され、 中河が ₩ マ州)、 (整理番号21)として『ゴルフ』(版画荘、 所収の際に、 「民族文化主義」を発表して全体主義を鼓吹した一九三七年、 久里の愛人は再び 中河はいくつかの改稿を行っているが、「アニエス」の出生地 こうした事態を領略できな その後の小説集 氷る舞踏場 「ゴルフ」 「フランス人」となり、 にも踏襲されていく。 他五篇』 『愛の約束』(人文書院、 久里の愛人は「フランス人」 (角川書店、一九五一・一一)、 一九三七・一一) 以後この設定が変更されることは しかし、 一九四〇・三)、 が刊行されているが、このとき、 『中河與一全集』 から 版画 -河の思想が全体主義的傾向 昭 荘 「ドイツ人」へと変更さ が刊行を開 和文学全集 『天の夕顔 は (第三巻 油 な 始 49 か 都 他 角 て 市 タル た 沠 た Ш

のように、 河 ば 女性登場人物の出生地について、 明らかに意図的な操作を行っているが、 その意図は必ずし

萌

確ではない

が明確な輪郭を獲得するのは、 ときの中河の議論は、 年にかけての中河が、〈科学とロマン〉が交差する地点を模索していたことについて、私はすでに論じている。この する形式主義を脱しようとしていたが、いまだ全体主義と名状しうるようなものではなかった。一九三一年から翌 の理念」に基づき、「「美しさ」という価値=内容」を小説に求めるようなものへとシフトしていったのである(3)。 むろんこうした発想の内部には、既に全体主義思想へと発展していく要素が胚胎していたと考えているが、それ またそのことに加え、そもそも『ゴルフ』刊行前後の中河の思想は、確かに、小説の内容よりもその形式を重視 ひたすら形式の重要性を主張するところから、「古典・悲劇、そして美の回復という三位一体 一九三七年頃以降のことなのである。

書店、二〇〇〇・七)における、「アニエス」に関わる部分を参照したい。 ②「アニエス」「ルイーゼ」の語源と内包されたイメージ ここで、久里の妻の名前の変更について簡単に触れておこう。まずは梅田修

『ヨーロッパ人名語源事典』(大修館

人気があった。『黄金伝説』によると、アグネスは敬虔で、慈悲深く、思慮深い、聡明な乙女であった。 アグネス(Agnes)は、ディオクレティアヌスの迫害によって殉教した聖女アグネスにあやかる名前として 彼女

ことが露顕し、 ローマの長官の息子に言い寄られるが、神に仕える身であると拒否した。そのためにキリスト教徒である

裸にされてローマ市中を引き回された。しかし、髪が伸びて全身を覆うという奇跡が起こるの

Agnesは、ギリシャ語 hagnós (áyvóg:聖なる、 純な、 貞節な) が語源の名前である。hagnós の女性形hagnē

 $(\dot{\alpha}\gamma \nu \eta)$ ラテン語では脱落し、 が名前となり、 さらに-g-が-n-に同化してローマ時代から名前 Agnes はアニェスと発音された。(4 ラテン語 Agnēs を経てヨーロ ッパ中に広がった。 ギリシャ語における滞気音H-は平俗

のギリシャ語を語源に持つ。キリスト教の聖人伝集『黄金伝説』に登場する聖女アグネスもまた、 「アニエス」 はヨーロッパ圏で定番の名前 Agnes のフランス語読みであり、 「聖なる、 純な、 貞節 な」という意味

初刊本の異同について-ゐる」と久里に告白しているように、久里をまるで信仰の対象とするかのように想い続けていた。 里の妻は、 シャ語のイメージを体現したような人物といえる。 また殉教した聖女アグネスのイメージは、 一貴方 (稿者注、 久里)の偉大な齒」を、「印度のお釋迦さんの舍利のやうに、 久里の妻の死を殉教という文脈で理解する契機も我 私あれを今も大切にして 々に提供する。久 物語のラストで、 語源であるギリ

「ゴルフ」考-初出誌• 実感するのである。 久里との曲芸飛行中に久里に手を離され、 て それゆえ、即断は避けるべきだが、「相手の為めにみずからを捧げて惜しまないものとしての恋愛の小説 小説「ゴルフ」を位置づけることもできるのではないか。 すなわち、「天の夕顔」 (『日本評論』一九三八・一) へと結実していく一連の「恋愛小説 海へと落下しながら「死」を覚悟するなかでも、 戦時下の中河は、「国が起る時は人の愛が真に燃えて 久里の妻は の初 期 のものとし 「幸福」

ズムが高揚した18世紀から19世紀のドイツにおいて特に人気のある名前となった」という。そして特に国民に愛 梅田の同書によると、「ルイーゼ」の語源は、 「男性名ルイ (Louis) から派生した女性名」で、 「ナシ 3 ナ

ある時である」⁽⁶⁾として、「恋愛小説」を書くことで、全体のために個を犠牲にする献身の精神=全体主義思想を

中河與一

人々に注入することを企図していたのである。

したのかもしれない。

されたのは、プロイセンのフリードリヒ・ヴィルヘルム三世の王妃ルイーゼ・フォン・メクレンブルク=シュトレ

にドイツ帝国の国母として愛されたルイーゼは「聖女」とされた。(?) ジが付与され、そして妻としては貞節な女性の象徴として熱烈に愛された。このようにプロイセンが愛し、 に身を包むヴァルキューリーのようにイメージされ、母としては、子どもたちに愛を注ぐ慈母マリアのイメー 彼女は、 フリードリヒ・ヴィルヘルムなき後ナポレオン戦争においては、 戦うプロイセンの象徴として甲冑 後

を加えたものだったが、「アニエス」という名前が喚起するイメージと決定的に異なるのは、この は「貞節」「聖女」といった、 九世紀以降のドイツにおいて、「ルイーゼ」という名前は、王妃ルイーゼのイメージを纏うことになった。それ 当時理想とされた女性像に、「ヴァルキューリー」という〈戦士〉としてのペルソナ 〈戦士〉としての

側

面であろう。

が描かれ、「女よ、 男をたよるべからず。 斯ういふ教訓を總ての女に教へたい」と妻に叫ばせており、 中河は ルフ」の第二部では、 中河が、名前のルーツや、名前に内包されたイメージを意識したかは不明である。しかし、三部構成の小説 女性の経済的自立という問題に端を発し、 一夫一婦的な婚姻制度の是非をめぐる夫婦の相克 「ルイ

ーゼ」へと名前を変更することで、 男性原理的な因習や思想に挑戦しようとする女性としての一面を強調しようと

ただし、「ルイーゼ」の名は、『ゴルフ』でただ一度使用されたのみで、これ以外の小説「ゴルフ」では、

ニエス」の方が適合的であるとすることができるだろう。 的に仮託されているのだとすれば、 もその後も、一貫して「アニエス」 全体主義思想の系譜を表現する名前としては、先述した理由により、むしろ「ア の呼称が用いられている。 仮に中河の思想的メッセージが久里の妻の名に寓意

225

(20)

初出誌・初刊本の異同について-

久里は妻君を時

々見ながら、

第一部で夫婦がゴルフをする場面である。

次に、そうした夫婦の相克の原因ともなった、久里の愛人に関する記述の異同を確認したい。まず見たいのは、

③「美しさ」の二面

性

線部分

(傍線はいずれも稿者による) である。「ゴルフ」では、愛人とゴルフをする際の久里の「言葉や身體つき」

アニエスの順に内的焦点化が行われているが、注目したいのはアニエスの内面が記述され

た傍

ここでは、久里、

然現はれて吾々の胸に影を投げたフランス女。(『ゴルフ』)

ルフをしたりしてゐる時の、

久里は妻を時々見ながら、

全く呼吸のあつてゐた昔の事を思ひだしてゐた。が妻は、

夫が別の女と一

緒にゴ あの突

あの張りつめた親切な言葉や身體つきなどを想像して胸を重くしてゐた。

(「ゴルフ」)

ゴルフをしたりしてゐる時の、張りつめた親切な言葉や身體つきなどを想像してゐた。なんと幸福な夫婦生活。

全く呼吸のあつてゐた昔の事を思ひだしてゐた。

が妻君は夫が別の女と一

など、直接見聞きしたわけではないものをアニエスが 〈妄想〉と換言してもいい種類のものである。 「想像」していることが報告されている。この

嫉妬にかられたアニエスの 方、『ゴルフ』では、「あの」という連体詞が加筆されたことで、久里の「言葉や身體つきなど」をアニエスは

過去に直接目撃したというニュアンスが加わり、「想像」という語はむしろ〈想起〉の意味で用いられることとな

について、『ゴルフ』ではより具体的な記述がなされるような変更が見られる。第二部の夫婦の口論の最中に、久里 が愛人と初めてあった時のことを想起する場面を比較してみよう。 同様に、「ゴルフ」では外見的特徴など具体的な記述が一切なく、読者にとっても掴みどころのなかった久里の愛人 すなわち、久里の愛人がアニエスにとってより身近で実体的な存在として描かれるような改変がなされている。

ものを間違へて眺めだしてゐるのに気付いた事がある。(「ゴルフ」) 彼は何時であつたか、 あの女と逢つてゐると、 あの女もゴルフが好きであつた。 自分の眼が總ての

に残る美しさが彼の心にしみついた事を思ひだした。初めて逢つた時、 その時、 彼は何時であつたか、あのフランス女と逢つてゐると、女は何時も黑い面帕をつけて來た。 あの瞬間、 思ひつくと自分の眼は總て その心

`ものを間違へて眺めだしてゐるのに気付いた事がある。(『ゴルフ』)

『ゴルフ』には、「女は何時も黑い面帕をつけて來た」とある。「面帕」とはヴェールのことだが、「ゴルフ」では

(22)世紀以降 3 | 0 ッパでのヴェールの意味作用についての文化史的研究を行ったルドミラ・ジョーダノヴァによれば、 「女の肉体にヴェールをかける/剥ぐという行為には、二つの意味合い」があったという(®)。第一には

まさにヴェールに包まれてきた愛人の外見が、ここで明るみにされることとなる。

が、「ヴェー 第二には、 イヴァシーのあいだにある様々な連想と結びつく」ものであった。すなわち、〈隠す/見せる〉という背反する性格 「秘密をほのめかす」という意味合いであり、この場合の「秘密」とは、「性的な秘密であり、 ルのエロティックな動力学の源泉」(g)となってきたという。 女とプラ

「女のみだらさを隠し、社会的ないしは心理的な安定を得ることを保証するもの」としての意味合いである。

そして

初出誌・初刊本の異同について-「心にしみつい」ている。さらに「彼はそんな事を考へながら女と幾度も逢つた。 つた。恐らく原始を思ひだしてゐるのに違ひなかつた。サロンでする戀愛は何時も疲れてゐる」と、愛人との逢 場面が加筆されることで、久里が愛人の「美しさ」に惑溺し、「ヴェールのエロティックな動力学」に拘 事実、『ゴルフ』では、「黑い面帕」で顔を覆う女に「初めて逢つた時、 あの瞬間」に、その 逢ふ場所は林の中や、草の中 「美しさ」 が久里

-であ 0)

考-

いくことが明示される。

中河與一 だして」しまう(=「気違ひになる」)原因と規定されてもいる。もっとも、 説明はないものの、『ゴルフ』では、直後に「自分は女から遠ざからうとしてゐる」との文言が加筆されたことで、 美しさ」に孕まれた負の要素への久里の警戒が示されることとなる。 このように、「美しさ」というものの決定不可能性に驚異を感じる久里の姿を新たに書き込むことで、「美しさ」 方『ゴルフ』では、 「美しさ」と狂気の関係性についての

ヴェールを纏った女の魅惑的「美しさ」が、久里の

「眼」が「總てのものを間

達

へて眺

をめぐる問題が、『ゴルフ』では前面に浮上させられている。こうした動向は、

先述したような 二美しさ」という

結論

価値

=内容」

を小説に盛り込もうとしていた当時の中河の思想状況を浮き彫りにしているといえるだろう。

気を孕む 代表されるものだが、そうした事態は、先行研究が指摘したような、「形式主義から全体主義へ」という中河の思想 主義からシフトしていく過渡期にあった、 的転換と呼応するものではなかった。むしろ、久里の愛人の「美しさ」に関する記述が加筆されたことにより、狂 物の一人である久里の妻が、「フランス人」の「アニエス」から「ドイツ人」の「ルイーゼ」へと変更されたことに 異を実施した結果、先行研究が「女性性の置き換え」と呼称したような事態が確認できた。それは、主要な登場人 中 河與一の小説である「ゴルフ」(一九三一・一○)と『ゴルフ』(一九三四・一○)、それぞれの本文について校 「美しさ」の両面性が前景化されたことは、 中河の芸術理論の表れを見ることができると考えられる。 「「美しさ」という価値=内容」を小説に求める方向へと形式

注

- $\widehat{1}$ 西村将洋 「浪漫派の 「ゴルフ」— 『日本浪曼派』 創刊前夜—」『日本近代文学』72、二〇〇五·五、
- 2 同前
- 3 拙稿 1011二·三、二一三頁 「中河與一 の科学的ロマン主義 一雜誌『新科学的』 刊行期間中の思考をめぐって」『鳴門教育大学研究紀要』
- $\overline{4}$ 梅田修『ヨーロッパ人名語源事典』大修館書店、二○○○・七、一三四頁
- 5 中河與一「恋愛小説について」『全体主義の構想』 「恋愛小説について」五四頁 作品社、 一九三九・二、

五三頁

中河

7 (8) ルドミラ・ジョーダノヴァ「第五章 前掲、 梅田『ヨーロッパ人名語源事典』二二六頁

けるジェンダー図像学』字沢美子訳、白水社、二〇〇一・六、一四〇頁

科学の前にヴェールを剥ぐ自然」『セクシュアル・ヴィジョン 近代医科学にお

(9)前掲、ジョーダノヴァ「第五章 科学の前にヴェールを剥ぐ自然」一三七頁 本研究は JSPS 科研費21K00306の助成を受けたものである。

附記

Yoichi Nakagawa's "Golf": A Comparison of the Original Text (1931) with the Text in the First Book Edition (1934)

Shuntaro KURODA

«Abstract»

published in 1931 is compared with the text that appeared in the first book edition in 1934 and the differences theory developed during this period. the original text in the magazine with the first book edition, it was possible to discover how Nakagawa's artistic edition. While writing "Golf," Nakagawa was attempting to embody his idea of beauty in his stories. By comparing they evoke. A further focus is on the addition of descriptions of the beauty of Kuri's mistress in the first book one of the main characters in the story, is discussed with reference to the etymology of the names and the images between them are analyzed. For example, the meaning of the change in the name and nationality of the wife of Kuri published a collection of stories titled Golf, which also included his short story "Golf." In this paper, the original text Yoichi Nakagawa first published his short story "Golf" in the magazine Bungei Shunju in 1931. In 1934, he

220 (25)